

プリントから電子へ： 湘南藤沢メディアセンターの取り組み

しまだ たかし
島田 貴史

(湘南藤沢メディアセンター主任)

1 はじめに

湘南藤沢メディアセンター（以下「当館」）は学部学生の1、2年生が所属するという点や、文理融合の様々な授業科目が開講されている点などが、本学のいわゆる教養課程のキャンパスにある日吉メディアセンターに似ている。図書館利用者の中心も学部学生であり、新聞や雑誌は電子媒体に切り変わったが、プリントコレクションの核とも言える「紙の本」はまだまだ健在である。しかし、当館のプリントコレクションに曲がり角が訪れる気配がある。その原因は、プリントコレクションを取り囲む環境にある。

そこで、本稿では、蔵書管理者の視点からこの問題を考え、当館における今後のプリントコレクションについて考えたい。

2 環境の変化

筆者が当館のテクニカルサービスを担当するようになったのは2014年6月からである。この間の大きな課題を挙げるとすれば二つある。一つは、本号の記事にある白楽サテライトライブラリーの閉鎖と山中資料センター2号棟の開設である。閉鎖される白楽に置いてある資料をどうやって山中2号棟へ移すか？ 当館の書架狭隘化を緩和するために追加で山中2号棟へ持って行く資料はあるか？といった判断を下す必要があった。そして、もう一つが洋雑誌（電子ジャーナル）の価格高騰問題である。この二つがプリントコレクションに大きな影響を与えている。

白楽・山中問題は、当館における今後の資料保存のあり方を規定することとなった。山中資料センター2号棟は、本学で約20年ぶりに誕生した100万冊が収容可能な保存書庫だが、この間の学内での増加冊数の全てを収納するほどのスペースはない。学内での保存書架の必要度を考慮し、当館から新規で資料を移動させることは断念した。また、白楽に移動させていた約4万冊についても、他センターとの重複資料は除籍して数を半減させてから山中2号棟

へ移すことにした。この判断は、保存スペースを渴望していた他センターの状況を当館なりに考慮した結果だが、今後は自館にある書架スペースでのやり繰りを覚悟することとなった。したがって、資料保存の考え方についても、当館単独での保存から、学内他センターとの「ネットワーク型の保存」に切り替える必要性を感じている。

もう一つは洋雑誌（電子ジャーナル）の誌代高騰に起因する「図書購入予算の減少」である。表1は当館の予算総額が現在と同額になった2011年度と2015年度の比較である。わずか4年の間に電子ジャーナルを含む「図書資料費」の支出が3,000万円近くも増えている。一方、図書購入予算を含む「図書支出」は、実績額で約600万円の減額である。高騰する電子ジャーナルの支払を買い支えるために図書支出を切り崩していることがわかる。この間、為替相場の大幅な円安傾向という特殊要因があったにせよ、予算総額が伸びない中で、電子ジャーナルを含む図書資料費が増え続ければ、「紙の本」を買う予算はさらに先細るだろう。

表1 2011年度と2015年度の比較

	図書支出		図書資料費	
	予算	実績額	予算	実績額
2011年度	61,260,000	44,766,243	106,080,000	98,797,951
2015年度	44,400,000	38,713,555	122,940,000	128,284,544

3 分野別未貸出率が示すもの

蔵書管理において「スペース」と「予算」に制約が生じた状況では、資料利用の「効率性」についても考えざるを得ない。そこで、当館での資料利用の効率性（投資に対して利用＝効果がどれほどあったか）を確認するために行った調査が、分野別未貸出率調査である。

調査は2014年と2016年に2度実施している。調査

方法はシンプルで、初回調査の場合、NDCの二次区分ごとに、「年度」の2012年と2013年（調査年の直前2年度）に未貸出数であった所蔵レコードを、「暦年」の2012年と2013年の2年間に受け入れた図書の数で割って算出している。この調査で調べなかったのは「選書基準と実際の利用の関係」なので、受入冊数が少ない主題は参考外とした。当館の選書基準¹⁾で収集レベルが高い主題であっても、利用があまりなければ、今後は他キャンパスの蔵書群を頼ることとし、当館の収集範囲から除外できないかと考えたからである。ただし、ここではその主題に関するJust in Case（将来、使うことがあるかもしれない）の収集法の停止であり、個別タイトルへの利用希望はこれまで通りの扱いを想定している。

表2 一次区分での未貸出率（2014年）

	受入数	未貸出数	未貸出率
総記	1,605	341	21.2%
哲学	964	261	27.1%
歴史	1,094	501	45.8%
社会科学	8,157	2,398	29.4%
自然科学	1,597	509	31.9%
技術・工学	3,055	856	28.0%
産業	1,616	328	20.3%
芸術・美術	1,688	548	32.5%
言語	421	101	24.0%
文学	524	207	39.5%
全体	20,721	6,050	29.2%

表2はNDC一次区分の未貸出率である。全体の未貸出率である「29.2%」との「差」で見た場合、産業や総記は未貸出率が低く、歴史や芸術・美術などは未貸出率が高い。未貸出率が最も高かった歴史の二次区分を見ると、日本史（49.7%）や東洋史（47.1%）は歴史全体の「45.8%」と比較しても未貸出率が高い。なお、当館の選書基準では、日本史・東洋史とも、上から二番目の「積極的収集」²⁾である。社会科学の二次区分を見ると、社会科学全体の未貸出率は「29.4%」であるが、中では法律の未貸出率（43.0%）が目立つ。選書基準でも三番目の「収集する」となっており、「積極的収集」よりは下位に位置づけられているが、NDC三次区分の323.9（行政法）や329（国際法）は「積極的収集」の扱いで

ある。323.9は湘南藤沢キャンパスが力を入れている「まちづくり」関連の主題として重めの蔵書レベルが割り当てられているが、「まちづくり」に関して言えば、二次区分の600（産業）のほうが未貸出率も「25.8%」で効率的である。なお、600（産業）の蔵書レベルは下から三番目の「選択的収集」である。一方、二次区分の150（倫理学・道徳）は、選書基準では「厳選する」という下から二番目の低レベルだが、未貸出率は「13.2%」と低い。150（倫理学・道徳）には人生訓が含まれており、起業家やコンサルタント業を目指す学生が好きなビジネス書が含まれているためだろう。

未貸出率から言えることは、率の高い主題の資料を購入しても利用されない確率が高いということであり、当館でJust in Caseには不向きな主題を炙り出す程度のことしかわからない。選書基準と未貸出率のギャップには、キャンパスの事情が影響していると思われる。歴史について言えば、調査時点では、日本史や東洋史の授業や研究会が（教職課程を除けば）湘南藤沢キャンパスでは開講されていないことが主な原因と考えられる。プリントコレクションを維持する余裕が失われる中、昔の基準を使い続けるリスクについても考える必要がある。特に、当館のような保存よりも利用を優先するワーキングコレクション型の図書館の場合、選書基準も利用の実態に合わせて「動かす」ほうが良いだろう。

4 キャンパスの事情

前節で触れたプリントコレクションに影響を及ぼす可能性の高いキャンパスの事情についても触れておきたい。現在、当館のプリントコレクションに影響を与えそうな事情に「GIGAプログラム」³⁾（以下「GIGA」）と「研究者の世代交代」がある。

GIGAは2011年度に環境情報学部を設置された「英語による授業だけで卒業に必要な単位」が取得できるプログラムである。2015年度から総合政策学部にも拡大され、今後は両学部合わせて1学年あたり約100人のGIGA生が在籍することになる。GIGAの拡大により、資料面では、学生が授業や学習で利用する「英語の本が足りない」という要望が学生や教員から寄せられている。開設以来、当館でも洋書は継続的に収集してきており、現在は約8万冊を所蔵している（図書の約3割）。しかし、現在の蔵書の多

特集1 プリントコレクションの今

くは、開設時に購入した「古い本」と「研究書・専門書」からなっており、GIGA生が求めている「新しい本」や「基本書・概説書」の類は少ない。書庫スペースや予算に制約が生じた自館のプリントコレクションだけでこの課題に早急に対応できるか?という問題である。

2015年はキャンパス開設25年の年であったが、開設時に40歳前後で着任した第一世代の研究者が退職期を迎える時期でもあった。今後数年の間に20~30名の研究者が退職し、大量の新任者が採用⁴⁾される予定である。新任者の募集要項に、「従来の研究領域に加え、これまでのSFCにない研究領域を切り拓き、社会課題の解決を先導できる人材を採用」とあり、キャンパスにおける研究領域に「入れ替え」が生じることが予想される。研究や授業で必要とされる主題が変わる事態が暫くは続きそうである。

5 プリントコレクションの今後

キャンパスの事情や利用者ニーズの変化を考えると、もはやプリントコレクションが資料提供の主役を張る時代は過ぎつつあると言える。とはいえ、今後しばらくは紙の本の利用がある程度は保たれるだろう。ただし、図書館にプラスの意味での「環境の変化」が起こらない限り、プリントコレクションを維持・発展させる基盤そのものが力を失う構造にある。外部環境を変えることが困難ならば内部での工夫が必要となろう。他キャンパスのメディアセンターも自館の延長と考えられるような「仮想化コレクション」のような存在に期待したい。複数の図書館で重複する資料やサービスを見直し、本学全体のプリントコレクションを維持・発展させるための原資を確保する必要があるからである。そのために、業務で使うツールの共通化について考えてみたい。電子資料の業務では「SFX」や「Verde」といった共通ツールを使用している。プリントコレクションでも、選書や保存に関する共通ツールを導入してはどうだろうか。例えば、オンラインの購入希望システムの共通化が突破口になるかもしれない。お互いの様子が見えるようになれば、そこからの「気づき」も高まると考えられる。

また、プリントコレクションの新しい活用法についても考える必要がある。三田でのスペシャルコレクションの活用⁵⁾が良い事例だが、プリントなら

ではの価値を高めるために、当館でもビブリオバトル(書評合戦)や本の福袋(お薦め本の詰め合わせ)などの企画を開発してきた。現在、最新の試みとして「書込み本」プロジェクトの準備を進めている。資料保存の点から、蔵書への書込みは「ご法度」とされてきたが、「他人の読みのポイントが知りたい」という利用者は意外に多い。悪口や落書きだけの失敗作となる可能性もあるが、新しい活用例になるかもしれない。また、蔵書管理者としては、本への書込みが、湘南藤沢キャンパスでの「テキストの読み方」として、他の機関にはない「ユニークなコンテンツ」となる可能性を考えてみたい。

これまで当館で行ってきた企画の経験から、利用者はその本に関する「ストーリー」を付加価値と見なす傾向がある。Amazonのレコメンデーションなどがその典型だが、なぜその本が図書館で所蔵されることになったのか? 誰にどのように利用されてきたのか? 慶應での活動とどのような関係があるのか?といったストーリーにも彼らは価値を見出すかもしれない。プリントコレクションの付加価値を高める「何か」を検討する必要がある。

参考文献・注

- 1) 湘南藤沢メディアセンター. 蔵書構築方針.
<http://www.sfc.lib.keio.ac.jp/about/cdpolicy/>
(参照 2016-11-20).
- 2) 蔵書レベルは6段階になっている。「網羅的収集」、「積極的収集」、「収集する」、「選択的収集」、「厳選する」、「収集しない」の6つ。なお、積極的収集の定義は「研究者レベルの要求を満たすような資料、研究のサポートに必要と思われる専門性の高い資料、学術情報を収集の対象とする。SFCでの重点主題、研究の最先端を意識した収集を行う。」となっている。
- 3) Global Information and Governance Academicの略称。以下に詳しい。
<http://ic.sfc.keio.ac.jp/ja/the-giga-program/>
(参照 2016-11-20)
- 4) 人事公募SFC-FR25. 湘南藤沢キャンパス.
<http://www.sfc.keio.ac.jp/employment/fr25.html>
(参照 2016-11-20)
- 5) 倉持隆. 貴重書、アーカイブ資料から「スペシャルコレクション」へ. MediaNet. 2014, no.21, p24-25.
<http://www.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/article/pdf/02100240.pdf> (参照 2016-11-20)